

コントラクトブリッジ実践的教授法の研究 (2)

清水映樹[†] 滝沢武信[†]

コントラクトブリッジはオークションとプレイの2段階で成り立っているゲームである。コントラクトブリッジをまったく知らない人に教える場合でも、最初から複雑なビディングシステムを覚えさせなければならない。早稲田大学では、比較的短期間でも教えられる新たな実践的方法を提案し、実際に入門者向けセミナーで試みた。本稿では、その継続として開講した授業での事例を報告する。

A Consideration about Practical Teaching Method of Contract Bridge (2)

Eiki SHIMIZU[†] and Takenobu TAKIZAWA[†]

Contract bridge is a game consisted of two stages of the auction and the play. Even when telling people who don't know contract bridge at all, it's necessary to make them remember complicated bidding system from the beginning. We proposed the new and short practicing way and experienced a seminar for actually guiding newcomers. In this article, the authors discuss a case study of the course that is continuance of the seminar at Waseda University.

1. はじめに

早稲田大学ゲームの科学研究所では、2008年10月から2009年1月にかけて、コントラクトブリッジ（以下、ブリッジと略す）の入門者向けセミナー（以下、セミナーと略す）を実施し[1]、その成果を受けて2009年4月からはほぼ同一の内容で正規科目の授業を開講した。本稿では、セミナーでの教え方の有効性を検証し、さらにその改善策の効果について授業での事例を報告する。

2. 授業の概要

授業は前期（2009年4月から2009年7月）後期（2009年10月から2010年1月）とも同一内容で行った。シラバスの抜粋と受講者数の実績を表2-1に示す。

表 2-1 セミナーの講習内容と受講者数の実績

回	タイトル	テーマ	세미나	前期	後期
1	ブリッジの基本	トリックテイキングのルール	5	14	22
2	ミニブリッジのやり方	ブリッジのルールとスコア	7	16	22
3	ノートランププレイ	アナーの昇格とエスタブリッシュ	9	12	20
4	トランププレイ	ドロートランプとラフ	8	12	18
5	フィネス	フィネスとドロップ	4	16	25
6	試合	ミニブリッジのチーム戦	9	12	23
7	ビディングシステム	システムの成り立ち	6	13	22
8	オープントリビッド(1)	1スータハンドのビッド	4	13	22
9	オープントリビッド(2)	バランスハンドのビッド	5	12	21
10	オープントリビッド(3)	2スータハンドのビッド	6	13	21
11	ディフェンス	ディフェンスの約束事	8	13	15
12	競り合いのオークション	オーバーコール	7	14	22
13	試合	コントラクトブリッジのチーム戦	10	13	23
14	アドバンスコース(1)	スラムアプローチと上級プレイ	5	12	23
15	アドバンスコース(2)	システムの補足と上級プレイ	5	8	17
合計			98	193	316

[†] 早稲田大学ゲームの科学研究所
Game Sciences Laboratory, Waseda University

参加者ののべ人数は前期 193 人、後期 316 人、ほぼ毎回出席していた受講者は前期 10 人、後期 21 人と、セミナーに比べて 2 倍、3 倍に増加した。(セミナーではそれぞれ 98 人、6 人)

テーブル数で比較するとセミナーでは 1~2 テーブルだったのに対し、前期は 3~4 テーブル、後期は 5~6 テーブルが常時成立した。

3. セミナーとの違い

3.1 前期授業

(1) 授業の構成

セミナーでの教え方の有効性を検証するにあたっては、なるべく同じ条件での事例を増やすことが望ましい。したがって基本方針は変えず、授業の進め方や講義内容についてもなるべくセミナーと同様になるよう努めた。基本方針は次の 5 つである[1]。

- ・ ミニブリッジから始め、プレイの基本を身につけさせる
- ・ ハンドを 3HCP レンジで分類し、ハンドの強さの感覚を身につけさせる
- ・ テキストは使用せず、その場で理解できることだけを説明する
- ・ チーム戦形式での実戦を重視し運に左右されないゲームであることを実感させる
- ・ 特定のビデオシステムにはこだわらず、ビッドの考え方を理解させる

実際には「その場で理解できること」が、結果的にセミナーより少なかつただけで、他はセミナーをすべて踏襲した。

(2) セミナーからの改善点

セミナーで指摘された 2 つの問題点[1]のうち、修了者のフォローについては、授業を開放することで復習の場を提供した。実際、セミナー修了者 5 名のうち 3 名が参加し、受講者と一緒にプレイをしながら理解を深めた。もう 1 つの問題点である復習用のテキストについては、受講者が書かれた内容に捉われてすぎて自ら考えなくなる恐れが排除できず、今回は作成を見送った。

(3) 問題点

人数が増えたことで受講者の意識が散漫になり、結果として時間が足らなくなった。説明を省略せざるを得なかった項目も多々あり、実質的には授業の密度が下がって質が低下した。逆に予定していた内容をすべて伝えようとして講義に費やす時間が長くなり、プレイ時間を圧迫することもあった。当然、ハンドレビューをする時間もなくなった。

講義内容をよく理解しないまま実習を始めた受講者はプレイが遅く、予定していたボード数が消化できないだけでなく、他の受講者に退屈な思いをさせたり苛立たせたりと、想像以上に悪い影響もあった。

講義の手応えや授業参加態度、熱意などは感じることはできたが、一人ひとりのビッドやプレイを仔細に見ていることができず、理解や習熟度を判断することはかなり難しかった。そのため、修了試験には新たな問題を追加し、講義内容の直接的な把握とブリッジに対する総合的な理解を調べた。

具体的には、講義で説明したビッドの基本や 4th best に関する知識などを問うだけでなく、ウィナーカウントやプレイ全体の構成力など基本を理解した上でブリッジというゲームの特質がどこまで感じ取れたかをも問うものである。受講者にとって紙上でブリッジの問題を考えることはおそらく初めてであり、問題文を理解しながら読み進めるだけでもかなり大変だったはずである。

追加した問題の一部を図 3-1 に示す。

問 3 South は 3NT のディクレアラになりました。オープニングリードは Spade の 4 です。

(1) 空欄に適当な数字または E、W のいずれか、あるいは適当なビッドを書きなさい。

オークションは South から始まり、次の経過を辿りました。

S	W	N	E
()	Pass	()	Pass
()	Pass	()	Pass
Pass	Pass		

N-S のハンドを図-1 に示します。

最初にオープニングリードについて考えてみましょう。

S4 が 4th ベストだとすると()の Spade は 3 枚か

()枚で、そのどちらなのかは Spade の()が

E-W のどちらから出てくるかわかります。もし()からなら()の Spade は 4 枚です。

次にプレイの方針を考えましょう。South の Club は最高で()トリックとれる形をしています。

しかし、Spade リードがきたので、Spade で()トリックと数えると、Heart で()トリック、

Diamond で()トリックとれますから、9トリック目標なら Club は()トリックで十分です。

	S	KJ10
ダミー	H	Q1084
(North)	D	A972
	C	J8
O.L. S4		
	S	A82
ハンド	H	K63
(South)	D	Q8
	C	AK1095

図-1 オープニングリード時

図 3-1 追加した試験問題 (一部)

3.2 後期授業

(1) 授業の構成

基本的に前期と同様の考えで進めたが、受講者の集中力が切れないよう講義は短めに終了させた。省略した項目は実習中に各テーブルをまわり、機会を見つけて個別に説明した。

なお期間中に2回の休講があり、冬季休業中に補講という形で本来の講義を行ったため、ディフェンスについては受講しなかった学生も8名いた。

(2) 前期からの改善点

さらに人数が増えたために前期以上に質の低下が懸念された。そこで、あらかじめ講義内容を絞り、講義中に時間を見ながら適宜補足することで効率的な講義を図った。

また前期は十分にできなかったハンドレビューと復習のために、プレイした6ボード分の簡単なハンド解説を作成して毎回全員に配布した。例として、第8回(1スタートハンドのビッド)にプレイした2番ボードのハンド解説を図3-2に示す。

#2	S 8	
	H Q96	
	D K985	
	C A8754	
S 93		S KQJ62
H KJ10732		H A85
D AQ4		D J73
C K6		C 92
	S A10754	
	H 4	
	D 1062	
	C QJ103	
1H-1S-2H-3H-?? : 10-12HCP, 4Hはどう?		
一番長いHでオープンして2Hとリビッド。レスポндаは11HCPで3枚サポートがあるから3Hと誘う。		
ルーザはS1、H1、D1、C2。HQを当てて、SでCが捨てられれば4Hもメイクするが、SouthはSAで勝ったらSラフを狙わずにCQを返せば、4Hはダウンする。		

図3-2 ハンド解説 (一部)

前期に行った授業の開放を後期も継続したところ、前期修了者12名のうち3名が参加した。うち1名はセミナーからの参加者である。

(3) 問題点

セミナーおよび前期にわかった問題点については一応の改善策を施したため大きな問題はなかったように思えたが、後述するように試験の結果が想像より悪かった。修了試験の後には授業がなく、説明する機会も失ったままである。もし正しく理解できていないために間違っただとすれば、早い機会に訂正する必要がある。

ハンド解説については、ざっと読んだだけで破棄した受講者や、ろくに読まずに置いて帰った受講者もいた。今後は知識やプレイテクニックの定着を図って、授業中に復習の時間を設けることも検討する。

4. 成果

4.1 実践的教授法の成果

今回の成果として、実質受講者と修了者(単位取得者)、初心者と即戦力の人数、およびそれぞれの比率を表4-1に示す。

表4-1 成果

項番	講座 区別	受講者 T	修了者 M	比率 M/T	初心者 B	比率 B/M	即戦力 P	比率 P/M
1	セミナー	6	5	83%	3	60%	2	40%
2	前期授業	14	12	86%	10	83%	5	42%
3	後期授業	19	16	84%	12	75%	5	31%
4	合計	39	33	85%	25	76%	12	36%

(注) 実質受講者：途中1~3回で放棄した者(合計10名)は含まない。

初心者：ボード数をこなし、その都度学んでいけば問題ないレベル

即戦力：このまま一般の競技会に参加しても迷惑をかけないレベル

入門者向け教授法の成果は、ブリッジプレイヤーがどれほど生まれるかに尽きる。興味を持って続けていけば自然に上達するはずであるから終了時のレベルはさほど重要ではない。一応ブリッジができる程度まで受講者が成長できていけば、評価している。

表4-1より、講座を修了した4人に3人は一応プレイができるようになり、さらにその半数はブリッジプレイヤーといえるレベルまで成長したと結論づけられる。

4.2 試験の結果

前期、後期とも修了試験では、セミナーとまったく同じ、ビッドからパートナーのハンドを想像させる問題[1]を出した。ビッドの解釈であるから必ずしも正解を押し付けられないが、8種類のハンドの中に明らかに誤りといえるものが3つあり、それらの答を1つまたは2つ選んだ人数（3つとも選んだ受講者は0人）について比較した。結果を表4-2に示す。

表4-2 誤答した人数と誤答率(1)

項番	講座 区別	受験者 T	誤数1 X	比率 X/T	誤数2 Y	比率 Y/T	誤答者 Z=X+Y	比率 Z/T
1	セミナー	5	0	0%	2	40%	2	40%
2	前期授業	12	4	33%	1	8%	5	42%
3	後期授業	19	8	42%	4	21%	12	63%
4	合計	36	12	33%	7	19%	19	53%

また前期に追加した前述の問題についても、

- ① 1NTオープンとステイマンコンベンション
- ② 4th best リードの解析

に関して誤った答を記入した人数を比較した。結果を表4-3に示す。

表4-3 誤答した人数と誤答率(2)

項番	講座 区別	受験者 T	誤数1 X	比率 X/T	誤数2 Y	比率 Y/T	誤答者 Z=X+Y	比率 Z/T
1	セミナー	-	-	-	-	-	-	-
2	前期授業	12	3	25%	4	33%	7	58%
3	後期授業	19	7	37%	10	53%	17	89%
4	合計	31	10	32%	14	45%	24	77%

表4-2、表4-3は、前期から後期になるにつれてレベルが下がっていることを示唆している。いずれもきちんと説明を聞けば直ちに理解できる程度の内容であるが、特に表4-3では正答者が2名しかいない。訂正は簡単なことだから受講者にとっては深刻な問題ではないとしても、逆にそんな簡単なことさえ理解させられなかったのだとしたら、改善策に効果がなく教え方にも問題があったと考えられる。

5. 問題点と今後の課題

4章で示したように、受講者の修了レベルには顕著な差が見られた。これは受講生の資質や意欲によるものなのか教え方に問題があったのか現時点で原因は特定できないが、ひとつには受講者が増えたことによる影響もあると思われる。本来受講者の人数によって講義内容を変える必要はないが、実習型の授業では講義の方法に何らかの工夫が求められているのかもしれない。教える内容や教え方という広義の教授法にとどまらず、効果的な講義方法という側面も今後の検討課題であろう。

6. おわりに

後期授業終了後、受講者の中には次のような動きがあった。

- ① 同好会の友人同士でボードとビデオボックスを購入
- ② ミニブリッジのパンフレットを友人に配布
- ③ ブリッジクラブへの入会希望
- ④ 来年度授業にアシスタントとして立候補
- ⑤ 友人に来年度授業への登録を推薦

ブリッジの巧拙はともかく、今回の教え方によってブリッジに興味を持ち、ブリッジを継続している受講者がいることは事実である。

しかし受講者はいまだわずかに1学級程度の人数でしかない。さらに事例を増やして研究を重ね、教える側のマニュアル作りにも着手していきたい。

謝辞 正規科目として開講するためにご尽力頂いた皆様に、謹んで感謝の意を表する。

参考文献

- 1) 清水映樹, 滝沢武信: コントラクトブリッジ実践的教授法の研究, 情報処理学会研究報告, GI-21, pp.93-100 (2009)
- 2) JCBL HP <http://www.jcbl.or.jp>
- 3) 東京大学 全学体験ゼミナール 『考える力を養う「コントラクト・ブリッジ」』 HP <http://lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~sbob/bridge/index.html>
- 4) Ron Klinger : Guide To Better Card Play, Victor Gollancz (1990)
- 5) Mike Lawrence : Hand Evaluation, Max Hardy (1991)
- 6) Henry Francis : The Official Encyclopedia of Bridge, ACBL (2002)